

東洋エクステリアが発信する環境情報誌

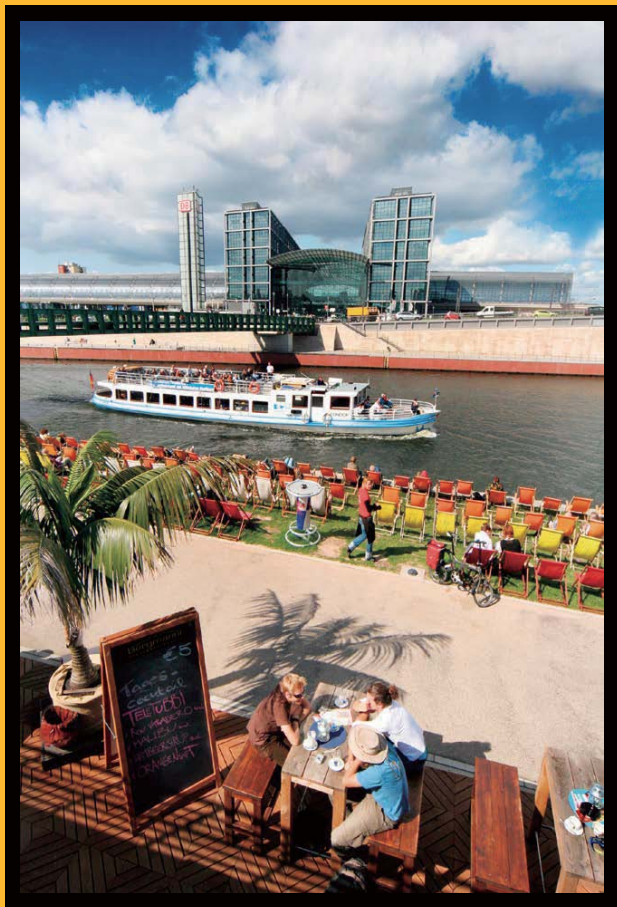
Nelsis

ネルニス

Vol. 8

特集

21世紀のランドスケープ・エコロジー
都市の空間を活かす



都市の隙間

◆

新たにオープンしたベルリン中央駅エリア。ここは日本で言えば東京駅周辺だ。
蛇行して流れるシュプレー河畔が夏限定でリゾートに変わる。
デッキチェアが並び、カフェやバー、野外ステージが生まれ、遊覧船が走る。
トラックで何トンもの土砂が運ばれ、子どもたちは砂遊びに興じる。
北国で夏の日差しを愛しむベルリナーには最高の贈り物となる。
日本では、インシャルプランは上手いが、ランニングまで気が回らないことが多い。
空間が生成変化しないから、すぐに消費され別の場所へみんなの関心が移ってしまう。
常に一過性の遊園地で、そこに住まうという意識は芽生えない。
寂れたら取り壊してまた造れば良いという発想になり、人の気持ちはいつも宙吊りのままだ。
船はテレビ塔の見える旧東地区へ向かってゆく。
寛いだ人々の表情には、かつてここが東西ドイツの狭間であった緊張はない。
百年に及ぶ騒動にさいなまれた後、中央駅は透明なガラスの建築として蘇り東西を結ぶ。
静かな空気なかで、次世代の子どもたちにやさしい目を注いでいる。

文・写真……シロバラ タク

02 [特集] 都市の空間を活かす 21世紀のランドスケープ・エコロジー

- 04 都心のオフィス街に骨董市が出現——東京国際フォーラム地上広場
- 08 大阪・道頓堀に生まれた川辺の遊歩道——とんぼりリバーウォーク
- 12 社会実験で試されたオープンカフェの効果——新宿・モア4 カフェ
- 16 [対談] どんな仕掛けがまちを楽しくするか……◆ 橋爪紳也・竹沢えり子
- 20 二見恵美子——時を越えた美しい景観を求めて
- 24 長谷川浩己——まちに佇める居場所をつくる
- 28 ストーリーが育まれるまち……◆ 枝川公一



30 Photo Essay

建物が移動するエキシビション「ノマディック美術館」



32 Project File [プロジェクトファイル]

- 石垣港離島ターミナル (沖縄県石垣市) ●宍道湖夕日スポット (島根県松江市)
- 東京ミッドタウン (東京都港区) ●豊洲二丁目地区春海橋公園 (東京都江東区)



42 TOEX 環境事業トップ対談

ユニバーサルデザインの先駆者(オピニオンリーダー)を目指して

46 駒ヶ根展示場 KAP リニューアルオープン



48 Product Message [プロダクト メッセージ/引戸]

- 北九州市立枝光小学校 (福岡県北九州市) ●長野県稲荷山養護学校 (長野県千曲市) ●三好町立黒笹小学校 (愛知県西加茂郡)
- 名古屋市立吉根小学校 (愛知県名古屋市中区) ●いなべ市立藤原中学校 (三重県いなべ市) ●相馬保育所 (青森県弘前市) ●特別養護老人ホーム・パラソゴしき (福島県いわき市) ●いわき市立草野小学校 (福島県いわき市)

57 世界のストリートファニチャー 7

ドイツ: フランクフルト アール屋根が特徴のバス停



バブル崩壊後、地価の下落や超高層マンションの定着などによって
都心部の不動産取得が容易になったこともあり、
都心の利点が見直され、都心回帰が進行している。

これからの都市環境を快適にするには、
人々が憩える場所や、人がにぎわう魅力ある場所が必要だ。
高層ビルの足元の公開空地や、狭い路地空間、屋上や水辺、

特集 都市の空間を活かす



しかし、高密度化する都市環境は、必ずしも快適とはいえない。
働く人、住まう人、訪れる人、それぞれの活動が混在するまちでは、
目指すべきまちの全体像が見えにくくなっているのだ。

ときには水上までもが、快適でにぎわいのある空間へと変わる。
大都市圏への人口集中が進むなか、
さまざまな空間の使い方を試みる、新しい動きを取材した。

● ● CASE ● ●
1
東京国際フォーラム
地上広場



特集
都市の
空間を
活かす

都心のオフィス街に

写真……シラバラタケ



骨董市が出現

2003年から始まった「大江戸骨董市」は、規模が大きいことで有名。最近では外国人の姿も多い。毎月第1・第3日曜に開催（問い合わせは大江戸骨董市実行委員会事務局、電話03-5444-2157）



樹木が風にそよぐすがすがしい空間に、にわかには市が立ち、まるでお寺の境内のようにぎわいだ。ここは東京屈指のオフィス街、JR有楽町駅前の東京国際フォーラム地上広場。平日の朝夕は丸の内界隈に通勤する人々の通過空間だが、お昼ときにはランチマーケットに様変わりし、土日でも実にさまざまなイベントが行われている。日本を代表するオフィス街が、ここ数年で大きく変貌しているのだ。



「私たちの仕込みのがんばりもありましたが、場所のわかりやすさと交通の便利さのおかげで、初回から大盛況でした」と語るのは、自らも骨董好きという大江戸骨董市事務局の浅野加奈子氏。イベント会社に所属する、骨董市の仕掛け人のひとりだ。当初は月1回、現在では第1・第3日曜の月2回開催で、日本で最も大きい露天の骨董市といわれ、骨董好きな外国人観光客の人気スポットになっている。出店数の多い第3日曜は、日本全国から250店舗が出店し、1日の来訪者は平均4万~5万人を数える。

東京の新名所となった 東京国際フォーラムの 骨董市

東京国際フォーラムは、東京都庁舎が新宿に移転した跡地に建てられたコンベンション&アートセンターで、広場を含む建物の設計はコンペで選定したアメリカの建築家ラファエル・ヴィニオリ氏が担当。1997年1月10日に開館し、2007年の今年で10周年を迎えた。当初、(財)東京国際交流財団が管理運営を行っていたが、2003年、民間に事業を譲渡。元丸紅

社長・鳥海蔵氏を社長に迎え、(株)東京国際フォーラムとして新たに運営を開始した。2001年から一般利用を始めていた地上広場部分も、民営化後はさらなる有効活用が求められた。

地上広場の総面積は約8700㎡。そこにケヤキ44本、カツラ15本、2人掛けベンチが43カ所に設置されていて、都会のなかであって緑豊かなオアシスの空間になっている。手始めに、2003年10月に「大江戸骨董市」を誘致した。最初から4万人近い人が訪れ、翌日の東京新聞の1面を飾ったという。

「いまではすっかり定着し、東京都の後援もいただいたので、事務局としても出店業者を厳しく選定し、質を保つように努力しています」と浅野さん。本物でないすぐに飽きられてしまう怖さを知っているプロの目があったからこそ、続いた骨董市。いまでは東京の観光名所のひとつになりつつある。



20台ものケータリングカーが出出し、世界の料理が味わえると人気のビアガーデン「ネオ屋台村スーパーナイト」は、4月から11月までの期間、月1回で開催

暗くなるとケヤキがライトアップされ、ライブ演奏がスタート。お祭りムード一色に

緑に囲まれたビアガーデン

地上広場の一般利用が始まった当初は、企業の商品宣伝キャンペーンなどに使うことが多かったが、民営化を機に、さまざまな試みが実施された。お昼の「ネオ屋台村」もそのひとつ。

「地上広場のにぎわいづくりに、お昼のランチ販売を検討していました。そこで、以前あるイベントでケータリングカーを出していただいた会社に、こちらから話をもちかけたのです。以来『ネオ屋台村』として平日の昼どきには毎日ここにケータリングカーが出現し、オフィス勤めの人々へバラエティに富んだランチを提供していただいています。それを続けていくなかで、夜バージョンのビアガーデン『ネオ屋台村スーパーナイト』に発展していきました」と語ってくれたのは、東京国際フォーラムの広報部ジェネラルマネージャー・佐藤悦子氏と、チーフ・マネージャーである澁谷実氏のおふたり。

2004年7月に「ネオ屋台村スーパーナイト」第1回が開催された。550~700席が用意され、2日間で3000人が来場。同年11月のボジョレー・ヌーボー解禁日に再び開催したところ、その日は雨天だったにもかかわらず多くの人が訪れた。どちらも好評を博したことから、翌年度は、4月から11月まで月1回のペースで開催することになる。

「女性のお客さんが多く、彼女たちの感想は『通常、ビアガーデンに女性だけでは行きにくい、ここなら気軽に来られる』『森の中でお酒を飲めるのは気持ちがいい』と、いずれも歓迎モードでした。土地柄、救急車のお世話になったこともなく、喧嘩沙汰も一度もありません」と一昨年、昨年とスーパーナイトを担当した澁谷氏は語る。丸の内らしいおしゃれなビアガーデン、願わくば毎晩オープンしてほしいものだが、運営は経費的に持ち出しが多いとのこと。地域のにぎわいづくりにと、がんばっている。

地元と連携しながら地域貢献に取り組む

こうしたがんばりは、地域の文化施設の中枢を担っていきたいという強い使命感からだ。

「社長は常々、『建物に1650億円、土地代に当時で3000億円がかかっている。施設自体が都民の財産なので、この価値を上げることが、すなわち都民の財産の値打ちを上げること。そのために一生懸命取り組むように』と語っています。特に地上広場は公共性が強く、顔となる場所でもあるので、私たちの姿勢が感じられる内容にしていきたいと思っています」と澁谷氏。実際、地域・社会貢献を目的として2005年からスタートした、ゴールデンウィーク期間に開催する「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン『熱狂の日』音楽祭」では、第3回の今年、丸の内周辺エリアも含め8日間で106万人が来場し、総合経済波及効果は136億円と試算され

た。まちづくりの中核施設として、今後とも地域とのさらなる連携を図っていく方針だ。

丸の内エリアがここ数年で大きく変貌している。大手町・丸の内・有楽町地区の再開発が目に見える形で進み、多くの商業施設が出店。それに伴って観光客・買い物客も増加しているのだ。そんななか、2002年に、ソフト面でのまちづくりを強化しようと、大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会を母体に、NPO法人・丸の内エリアマネジメント協会が設立された。東京国際フォーラムも活動の舞台のひとつとなっている。

協会事務局長の金城敦彦氏は活動の趣旨をこう語る。

「大手町・丸の内・有楽町地区を中心とするエリアで、街をよりいっそう活性化させようと、地域の法人・企業と連携をとりながら、参加・交流型のイベントを開催しています。ここで働いている人やOB、学生など多くの人に、この地域にホーム

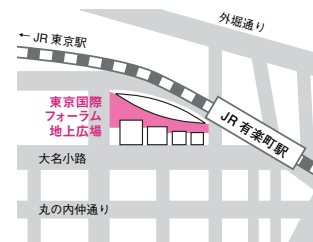
タウンのような愛着をもってもらいたいと思っています。以前は、仕事が終わったらさっさとこの街から出よう、という人がほとんどでしたが、いまは友達をこの街に呼んで、丸の内アフター5を過ごすようになってきた。この変化のほうに、意味があるのではないかと感じています。東京国際フォーラムで開催されたビアガーデンも仕事帰りの人でにぎわいました。この街に長くどまってくれる、そういう風景がうれしいですね」

協会主催で2005年からスタートした「丸の内ウォークガイド」は、丸の内地区で働いていたOBたちがガイドとなって、丸の内の魅力を伝えるというもの。歴史、浪漫、アートの3コースがあり、歴史的建造物や公園をおよそ2時間かけて歩く。働く人も、訪れる人も、この街のファンになってくれることを期待している。

かつては、平日19時を過ぎると人通りが減り、土日ともなるとゴーストタウンのように静まり返っていた街に、親しみ

のもてる新たな表情が加わり、丸の内は街全体が徐々にコンバージョンされるように、多様性のある街へと変化しているのだ。

LE



● ● CASE ● ●
2

とんぼり
リバーウォーク

大阪・道頓堀に生まれた 川辺の遊歩道

特徴
都市の
空間を
活かす

写真……石井雅義

遊覧船で道頓堀川を楽しむことも。「とんぼりリバーウォーク」は2008年3月まで河川工事等のため運休

大阪の観光名所のひとつ「道頓堀川」。その存在は全国的に有名でありながら、メイン通りの裏手にあるため、これまで人が川に近づくことはできなかった。大阪市では、この貴重な水辺空間を生かし大阪をさらに魅力あるまちにしようと取り組み、道頓堀川に遊歩道が誕生した。水を間近に感じられる気持ちのいい環境と社会実験としてのイベント開催で、新しい憩いの場として川辺に人々が集い始めた。



左●遊歩道の幅は8mあり、ゆったりとしたスペース。買い物で歩き来するほかに、川に向かって設けられた階段に腰掛け、くつろぐ人の姿も多く見られる
右●夜になると川面に道頓堀の明かりが映り込む



繁華街に憩いの空間を

大阪を代表する繁華街「ミナミ」と「キタ」。そのひとつ、難波から道頓堀にかけて広がるミナミは「食い倒れのまち」として知られる。なかでも道頓堀は飲食店を中心とした商店が連なり、夜には江崎グリコをはじめとする数々のネオンサインが光り輝く華やかなエリアで、昼夜問わず多くの人を訪れる観光名所でもある。

この道頓堀の北側に位置し、宗右衛門町通りに挟まれた道頓堀川は、ミナミを東西に流れる一級河川。まさに繁華街の中心にあり、大阪を象徴する存在だが、これまで橋の上からしか眺めることのできない閉ざされた川であった。

1950年のジェーン台風による高潮対策事業を皮切りに、昭和40年代には汚濁対策と高潮防御として舟形の高い護岸が造られ、次第に道頓堀川に人が近づきにくい構造になっていきました。河川についてははもと、治水と利水という目的があるため、水をいかに海へ流すかということに取り組み、その結果、川がコンクリートの壁で覆われた状態になってしまったのです」と大阪市建設局下水道河川部河川担当係長の染谷氏は、その理由を話してくれた。

しかし近年、全国的に水と触れ合う生活の重要性が見直され、1997年には河川

法がこれまでの治水、利水に「環境（水質、景観、生態系等）の整備と保全」という目的を加え改正された。また、大阪では2001年、国による21世紀型都市再生プロジェクトの選定を受け、「水の都大阪」再生に向けた大規模開発が進められている。道頓堀川でも、もっと人々に水に親しんでもらおうと整備事業が行われ、2004年12月に完成したのが「とんぼりリバーウォーク」だ。両岸に設置された遊歩道は、川のせせらぎと御影石、ウッドデッキで構成された広々としたスペースによって、繁華街にありながら、まちの喧騒から一歩距離を置いた、憩いの空間を演出している。

遊歩道は なにわの水辺劇場

道頓堀川はもともと、物資輸送のために運河を開削し1615年に完成した堀川で、この開発に伴って周辺にはのちに歌舞伎の中座（現松竹座）となる中之芝居などの芝居小屋が立ち並び、芝居町として栄えた歴史をもっている。

この歴史的背景を生かそうと「なにわの水辺劇場」をテーマに、とんぼりリバーウォークのデザインは進められた。今回整備された戎橋から太左衛門橋までの170mに及ぶ区間は、幅8mある2段式の

遊歩道になっていて、通行するだけにとどまらず、イベントステージとなる広場の空間やパラソルを置いたカフェテラスの空間が設けられた多機能なつくりになっている。

「遊歩道の上段の御影石は昔の掘割を、下段のウッドデッキは棧橋をイメージしています。ここは繁華街ですから、買い物などをする人が通るための歩道を上段に、さらに川に近づいてもらえるよう、そこから下りて水際で楽しめるスペースをつくりました。いままで、道頓堀川は通りの裏であり、店舗の室外機が置かれているような場所でしたが、とんぼりリバーウォークができたことで、第二の正面として川に向かって入り口を開く店も増えています。いままで人が立ち入れなかった場所が、人と水辺が出会うことにより、新たに憩いと賑わいの環境に生まれ変わりました」と染谷氏。

社会実験のイベントで 開かれた水辺に

国土交通省では2004年3月に「都市及び地域の再生等のために利用する施設に係る河川敷地占用許可準則の特例措置について」の通達を出し、一定条件のもとで河川敷地でのイベントや物販行為を認めた。道頓堀川もその対象となり、とんぼり



ライトアップされ華やかな演出が印象的な光のイリュージョン



難波八阪神社船渡御。遊歩道ができたことで近くで見物できるようになった（写真上ともに写真提供：大阪市建設局下水道河川部河川担当）

リバーウォークでは、にぎわい創出を目的に社会実験としてさまざまなイベントを行っている。

イベントはルールに基づけば誰でも開催でき、1か月前から申し込みを受け付けている。地元の商店会やNPOが歳事にまつわるイベントを多く行っているほか、一般企業がPRやオープニングイベントに利用することもあり、参加数は年を追うごとに増している。

「夏祭りの難波八阪神社船渡御では、これまで道頓堀川を渡る船を橋の上からしか見ることができませんでした。遊歩道ができたことで間近で楽しめるようになりました。また、2006年末に近く光のイリュージョンの際には、心齋橋から難波へと直進していた人の流れがほかへも向かうなど、イベントを行うことで人通りも変わってきています。坂のある風景が人を惹きつけるように川もまちを表す資質のひとつ。道頓堀川を通じて、まちと川の環境をよりよくしていきたい」と話す染谷氏。

これまで人々が背を向けていた水辺を表舞台へと再生させた、とんぼりリバーウォーク。今後さらに範囲を広げ道頓堀川の水辺整備を進めていくという。川をまちと一体となった豊かな環境ととらえることで、水辺に新たな集いの場が作り出されていく。



上・下左●2段式の遊歩道には階段のほかスロープも設けてある 下右●遊歩道整備に伴い、太左衛門橋も木を用いた新しいデザインに。かつては橋の上からしか川を見ることができなかった



以前の道頓堀川。両岸は人が入ることはできなかった（写真提供：大阪市建設局下水道河川部河川担当）



社会実験で試された オープンカフェ の効果

都市の
空間を
活かす

3K(臭い・汚い・危険)のイメージがまだ残る新宿駅東口。毎日300万人以上が乗降する新宿駅があり、アルタ、伊勢丹、歌舞伎町と、世代や嗜好の違う人々が集まる交差点のような場所であることから、東口には常に人が多く、近年は外国人観光客も増加している。そんな観光都市への変貌を迫られるなか、かつてのイメージからの脱却が試みられている。

写真……白石ちえこ



イベントのポップが置かれ、情報発信の場としても活用される



● ● CASE ● ●
3
新宿モア4番街
モア4カフェ



放置自転車・ホームレス 対策の決め手

新宿駅東口を出てすぐ、新宿通りと靖国通りに挟まれた新宿3丁目一帯は「モア街」と呼ばれ、人々に親しまれている。モア(MOA)とは「mixture of ages」の頭文字で、さまざまな世代が交流してコミュニケーションをとる街という意味を込めて1987年ごろにつけられた。モールという発想が全国的にもまだ珍しい時代だった。

モア街には御影石やタイルで舗装された通りが5本あり、最も道幅が広いのがモア4番街である。ケヤキの植栽が心地よい日陰をつくり、石畳のオープンカフェにくつろぐ人の姿も多い。ここが、社会実験として新宿区駅前商店街振興組合が取り組んでいる「モア4カフェ」である。しかし、そもそもどうして車道にオー

ブンカフェが開設されたのだろうか。区の担当窓口である新宿区環境土木部道とみどりの課計画主査の佐藤辰生氏にお話をうかがった。

「二十数年前、駅前商店街がモール化を発案したころは世の中パブルで、歌舞伎町は風俗産業が旺盛でした。その波が新宿3丁目まで押し寄せてきて、街の品格が脅かされてきた。それを阻止するために道路環境を改善して、健全な人たちが集まるまちに戻そうと、新宿駅前商店街振興組合の二世会が中心となって動きだしたのです。ちょうど新宿区に都市整備室ができ、要望の受け皿ができたころでした。区や都から補助金をもらい、地元商店街が5億~7億円かけて舗装を整備し、雰囲気の良いモールができました。しかしパブルが崩壊してホームレスが増え、彼らの汚物や荷物、さらには放置自転車

などで再び環境が悪くなってしまった。環境土木部の自転車対策係も対策を講じているのですが、いたちごっこでした。そのころ国土交通省道路局から社会実験^{*注}として、オープンカフェなど地域主体の道活用の呼びかけがあり、これをうまく利用してみようということになったのです」
区が主体となり、2005年9月から12月末までの延べ54日間、社会実験を実施。通りに面して出店していたバーニーズ・ニューヨークの協力により実施したテントでのカフェが話題となった。その結果、違法駐車・駐輪や不法占用もなくなり、道路環境が確実に改善された。ところが社会実験が終わると、たちまち元の悪い状態に戻り、以前よりクレームがたくさん出たのである。

「そんなこともあり、すぐさま第二次の社会実験が計画されました。実施期間は

2006年8月から2007年7月まで約1年。今回は主体を区から商店街に移すことになったのです」と佐藤氏。実質的なオープンカフェの事業者が見つかったことで、仮設ではあるが本格的なメニューが出せる店舗を2カ所設置。道路上の仮設建築物については、特定行政庁と区長が許可を出したことで実現した。晴れていれば毎日、昼の12時から20時まで営業した。

「結果、すごく環境がよくなりました。違法駐輪・駐車も激減しています。美観に関しても、カフェのスタッフたちがオープン前に道路を清掃し、草花に水をやって維持しています。営業に必要な上下水道や電気施設の整備以外に区からの特別な補助はありませんが、そのかわり道路占用料を免除しています。区では環境改善とあわせ、道路空間を活用することによって、まちにぎわいが創出できれば、当面の



カフェ事業者の心意気

第二次実験期間の2006年8月から4月までの利用者は、売上から換算して11万6331人、1日平均では482人。第一次の倍だという。多いときで1日3000人という日もあったとか。買わないお客さんもかなりいるので、実際の利用者は20万人以上と推定される。そしてこのカフェ運営を買って出たのが、若きベンチャー起業家の畑宏芳氏（ジーニア&アーレイ（株）代表）だ。もともとカフェ経営の経験のない彼が、なぜここでオープンカフェをやることになったのだろうか。

「きっかけは新宿という街に対する思い入れでしょうか。出身は長野で、東京に出るといってほしい新宿なんですね。中央本線の起点であり終点ですから。振興会のなかにも長野県出身の方が多い。



新宿は歓楽街としても世界的に有名なまちです。情報発信力も高い。それを考えて、これは少し本腰を入れてやってみようと思いました。カフェを始める前は女性一人で通るのが怖いような通りでしたから、オープンカフェはどうかと思ったのですが、調査を始めて半年たち、人の流れを変えることができればなんとかやれるのでは、と。実際やってみると大変ですね。初期投資総額の4000万円は、まだま



写真：編集部



だ回収できていません。天候に左右され、暑すぎても寒すぎてもお客さんは座りませんし。集客のためにライブをやったり、メニューの内容を検討するなど工夫しています」と畑氏。

メニューの価格帯は200～500円。椅子は通常280脚、テーブルは50～60あるので、フル回転すれば1日100万円以

区も商店街も継続を望んでいる

そうした畑氏たちの努力を応援している地元・新宿駅前商店街振興組合専務理事の和田健一郎氏はこう語る。

「新宿は、これまで何もしなくてもお客さんが来ていましたが、お台場や汐留など新しい商業集積地ができたので、都市間競争の時代に入りました。そのなかで、

いかに新宿に来てもらうかの戦略が必要です。22年前からこの商店街では道路を整備し、ソフト面では、放置自転車やホームレスのダンボールなどを取り締まる環境浄化、看板はみだしチェック、クリーンデイと称した清掃をそれぞれ月2回、行っていました。しかし見回ったあとはまた元に戻ってしまう。駅から区役所に行くには、まずこのモア街を通ります。新宿が変わったことを来街者に示すには、ここがきれいになることが一番でした。そこで区の協力のもとオープンカフェをスタートさせました。実際とても評判がよく、浮浪者が減り、客層も変わった。カフェの採算面で問題が残りますが、組合も効率化に協力しています。カフェを道路上で365日展開しているところはほかにありませんから、今後もぜひ続けていきたい。仕事、飲食、物販の3つが混在している新宿は、歌舞伎町も含めて面で変えていかないとはいけません。来てよかったと思える街にしたいと思っています」

地元商店街の熱心な働きと、若き起業家によって実現したオープンカフェ。今後はどのような展開になるのか。前出の佐藤氏はこう語った。

「確かにこのオープンカフェで環境がよくなっているものの、現行の法律内では本実施は難しい。だから社会実験なのです。全国でもオープンカフェはいろいろところで実施されていますが、一時的なものです。道路を使って、しかも仮設の建物で毎日営業しているところは皆無でしょう。おそらく地方都市では、毎日やってもお客さんが来ない。新宿だからこそできることです。しかも公益性・公平性があることが大事です。

私は当時、できただけの都市整備室

にいて、モア街の整備に20年前からかかってきました。この地域は、区画整理されたときの境界認定の確認書がないなどの問題があったなかで、一致団結して道路整備を実現させました。そういう地元の情熱を知っています。今回のオープンカフェについても、それだけの覚悟と情熱がないとやれません。こういうことは行政だけではできませんよ」

にいて、モア街の整備に20年前からかかってきました。この地域は、区画整理されたときの境界認定の確認書がないなどの問題があったなかで、一致団結して道路整備を実現させました。そういう地元の情熱を知っています。今回のオープンカフェについても、それだけの覚悟と情熱がないとやれません。こういうことは行政だけではできませんよ」



この社会実験、すでに2007年8月から第三次が実質スタートしているが、今後もおそらくやめることはできないだろうと佐藤氏は予測する。10月には商店会をはじめ警察や保健所、消防署など関係者を集めて協議会をつくり、社会実験から本格実施に向けて法律改正の要望なども視野に入れ、話し合っていく予定だという。

全国でさまざまな社会実験が展開されているが、本格実施に至るまでには困難も多い。地域が抱える問題に、地域住民や関係者がいかに真剣に取り組んでいくかが試されている。少しでも快適なまちにするために、既存の枠にとらわれないさまざまなアイデアが必要な時代になってきたのだ。



*注：社会実験とは、新たな施策を本格的に導入する前に、場所や期間を限定して地域とともに試行する取り組みのこと。社会実験の実施により、施策の課題や効果などを、本格導入の前に把握することができる。1997年6月に建設省（現国土交通省）道路審議会答申において提案され、実施が決定。1999年から社会実験を実施する地域、団体を公募する制度を導入。詳細は国土交通省道路局ホームページを参照。
 ◆http://www.mit.go.jp/road/demopro/

どんな仕掛けがまちを楽しくするか

対談

橋爪 紳也 ● 大阪市立大学都市研究プラザ教授
竹沢 えり子 ● 銀座街づくり会議企画運営担当

2002年ごろより、それまでの郊外化、ドーナツ化現象から一転、都心回帰現象が始まっている。東京の中央区では2000年からの5年間で約35%の人口増加を記録。大阪の中央区でも同じ5年間で21%増となっている。高密度都市居住を快適にする新しいまちの姿とは、また、どんな仕掛けがまちを楽しくするか。都市間競争の時代のまちづくりについて、次代を担う世代のおふたりに語っていただいた。

変わり始めた都市の風景

橋爪●最近強く思うのが、20世紀的な産業都市のあり方に対して、違う形で都市の理想を語る傾向が出てきたということです。以前は日本でも、アメリカの大都会のように、高層ビルが林立するオフィス街を中心とした都市を計画することが善いとされてきたと思います。1920年代には日本でもすでに、都心を意味する「ビジネスセンター」、あるいは「ラッシュアワー」という外来語が使われ始めています。以後、今日にいたるまで、一方で郊外は工場地帯や住宅地として開発していく、空間を分けて計画していくことが続いできました。

しかし、人口が減少に向かうことを前提に、地方ではコンパクトシティが提唱されました。また大都会では超高層マンションが建ち、都心部に住む人が増えてきた。仕事・遊ぶというさまざまな機能が交じり合った本来のまちの姿を志向する界隈が、都心部にも出てきたように思います。20世紀は国家の時代であり、21世紀は都市の時代です。20世紀はどの国も同じような近代化を目指し、国土の都市化をはかってきました。21世紀はそれぞれの都市が個性をのびしていく時代といえるでしょう。

私の故郷である大阪のミナミは、高度成長期に多くの住人が郊外へ移転し、まちが空洞化してしまいました。しかし私たちが子どものころまでは、仕事場と住まいがひとつになって随所にコミュニティができていた。それが崩れたことは、中心部が寂れた大きな要因だと思います。

竹沢●銀座も以前は1階で商いをし、裏や上に商店主が住んでいましたが、いま彼らの住まいは港区、世田谷区、大田区あたりにあります。でもいつか銀座に戻ってきたいと思っ

ている人も多いようです。ところが、いまの銀座は、例えばヒルズ族のようなベンチャー企業の成功者でなければ家賃が払えないほど地価が高くなっています。小さなマンションに入居するのはオフィスとして利用する人がほとんどなのが現状です。そんなことで、銀座では単純に住宅を増やすことには消極的です。江戸時代のように大家がいて店子の人生相談まで請け負うような管理の仕組みができていけばいいのですが、セキュリティのためとはいえ、オートロックで閉ざされたマンションがいくらできても、まちに根ざす人はそこに住まないともいえますね。

橋爪●それは日本の住宅全体の課題で、住んでいる人が公共への意識をもって住んでいるかというところではない。日本の場合、住宅は不動産で、まちとの関係をあまり考えないマンションの形になっていますね。

竹沢●近ごろは個人情報保護法で情報が提供されず、町会が名簿をつくれなくなっています。新しくマンションができては住人の顔が見えず、中で何をされてもわからない。

橋爪●これまでそういった部分を補完してきたのが共用スペースでした。古くはま



上●大阪ミナミにあるグリコの看板は道頓堀を象徴する顔。今年は第11回IAAF世界陸上2007大阪のユニフォーム姿に 写真：石井雅哉（顔写真も）

下(2点)●第4回銀座スペースデザイン・学生コンペで、キンザ・コマツ賞を受賞した「ENERGY」。制作：中森麻未・滝口星美（武蔵野美術大学）、写真：田代朝岡

都市の
空間を
活かす

ちの会所だったり、あるいは近所の飲み屋や喫茶店であったり、そこに行けば顔見知りが必要というサロンのような場所です。そういう、地域に根ざした活動が行われる拠点があった。私は大阪の都心でまちづくりNPOのプラットフォームをつくる活動を重ねてきました。そのねらいは、まず第一に、顔見知りになれる場をつくりたいという思いからです。「現代の会所」をつくるべきだと考えています。

路地空間の見直し 地域主体の都市再生プロジェクト

橋爪●私は大資本による面的な再開発を否定するものではありませんが、それ以上に、まちなかのあちこちに楽しい拠点や界隈ができてきて、エリア全体の魅力を向上させるという動きが必要だと思っています。昨年出した『大阪のひきだし』（鹿島出版会）という本では、大阪の船場などで、そういうことに気づいた人たちが始めた、さざやかなひとりの「もうひとつの都市再生」を紹介したものです。「言い出したものが最後までやる」という大阪の気風もあり、まずは事を起こしてみようという勢いがあります。年配者も若い連中のやることを懐深く見守る姿勢で、組織や制度や前例よりも、言い出した人物の手柄で応援するところがありますね。

大阪で私が感じている危機感のひとつは、ストリートを単位とした都心独特の個性が薄れている点です。例えば道頓堀は、武田製菓やシオノギ製菓をはじめとする製菓会社が集中する菓のまちでした。久太郎町や久宝寺町は雑貨や繊維の問屋が多い。そういう

同業者同士が集まるまちは、そもそも城下町にさかのぼる町家の伝統を受け継ぐものであり、日本の都心を構成する大切なユニットであったと思う。それが産業構造の変化や流通の変化で、経済に由来するコミュニティも崩れてきた。結果として、空いたところに駐車場やマンションが入ってきた。低層階が店舗だったらまだいいのですが、通りの店の並びを分断するような形でマンションが入ってくる。道に面して、高い場が連続しているという構成が崩れてしまったように思います。

大阪の三休橋筋では、大阪ガスの30周年記念事業に加えて、地域の商人が寄贈する形で、通りにガス灯を設置しました。地元商店会と行政も協力してくれています。国の重要文化財である綿業会館のような歴史的建造物もある通りなので、とてもいい雰囲気になりました。大阪の都心である船場地区は昔から、東西方向の道がそれぞれ同業者街としての個性をもっていました。それを南北に貫いている三休橋筋は、もともとなんの個性もない通りでしたが、新たに個性をもった通りができることで、界隈に回遊性が出てくるのではないかと考えています。

竹沢●銀座は、地元の人たちが町会や通り会を集めて2001年に「全銀座会」という組織をつくりました。2004年には、全銀座会をベースに「銀座街づくり会議」というまちづくり組織も立ち上げました。銀座6丁目の松坂屋と森ビルが2ブロックにわたって超高層ビルに建て替えるという大規模再開発案を提案してきたことをきっかけに「銀座にふさわしい開発とは何か」という課題に取り組んでいくことになりました。地区計画をみんなで見直していきながら、顔の見えるまち、お互いあいさつができることの大切さ、「銀ブラ」の重要性、などに、通り会の人たちが気づいていった。当初、ほかの丁目の方は6丁目のことには関心がなかったのですが、これは全銀座の問題だ、というように変化していったのです。また、これをきっかけにまちについて勉強するようになりました。シンポジウムを何度も開きながら地区計画を改正し、建物の高さや容積率、壁面後退など、大きな骨格を決めていきました。

改正の結果、銀座地区の建物高さ制限は56m。ただし旧木挽町地区では「文化」に寄与すれば高い建物を建ててもいいことになりましたが、では「文化」とは何かという次の

東京、大阪の二大都市の変化

Eriko Takezawa

Shinya Hashizume



課題が浮上してきました。

以前銀座では「大銀座まつり」という大きなお祭りをやっていたのですが、2000年にそれをやめたあとは、大きなイベントを年に一度どんとやるよりも小さな仕掛けがたくさんあったほうが銀座らしいのではないかと、という考え方がなっているように思います。文化的な質の高いイベントが、銀座じゅうで行われているほうがいいんじゃないか、という意見が主流になってきたのです。毎年秋に行われている催事「プロムナード銀座」は、大手代理店を排して、地元が手作りで行っています。秋だけで年間イベントを催事委員会が把握して、集約していく。イベントの内容も、一日に集中して何万もの人が来るというよりは、継続的に来てくれるようなものにするという方向になっています。そのなかで、銀座通りだけをメインにしたイベントではなく、各通りや路地の魅力を再認識するようになりまして。「大銀座まつり」をやめたのは今となっては英断でしたね。

ファンをつくり、人を育てるまち

橋爪●都市の文化とは何かと考えますと、二つの面があると思います。ひとつは文化を継承していく装置としての都市。地域の歴史やそこで生まれたさまざまな活動や出来事を記憶し記録して、次の世代に受け継ぐような場合が都市だという考え方。もうひとつは、都市は文化の忘却装置であるという側面。都市にはいろいろな人が出入りして、時代によって流行や担い手も変わります。流行の事柄をどんどん忘れていくからこそ、新しい文化が生まれてくるという考え方です。実はそのどちらの面もあるといえます。例えば銀座はまさに消費の場であり、流行発信の場ですから、絶えず新しいものをつくるためには何かをどんどん忘却していかないといけないですね。けれど伝統的に忘れてはいけないまちの個性や由緒、場所の物語もある。その読み方や、組み合わせ方をどう考えるのか、というのが問題なのだと思います。

銀座の伝統のひとつにショーウィンドーがあります。優れたクリエイターたちがウィンドーディスプレイを競って、これほど集まっているまちというのは、日本ではほかにはないでしょう。20年、30年たつてウィンドーそのものはすっかり変わっているかもし

れないけれど、日本におけるディスプレイのメッカであるという本質は継承していくという点が大事ですね。

竹沢●おもしろいのは、ショーウィンドーはレンガ街の列柱の間にできたという話です。レンガ街は近代黎明期の象徴で、その歴史のなかで生まれてきたのがショーウィンドーであり、その中の作品は常に更新されて残らない。まさに銀座らしい話です。そこで、このショーウィンドーに着目して「まちが人を育てる」ためのイベントを行っています。

最初の橋爪さんのお話にあったように、都市空間はどんどん分けて、工場や住宅同様、大学も郊外へ移転していきました。学生のころは、まちで雑踏にもまれながら学ぶことも多いと思うのですが、まちに学生が来なくなりました。銀座にも若い人が来なくなっています。例えば八王子にある東京造形大学から銀座へ出るのに3時間くらいかかっているようです。学生が都心を知らない。都会でつぶって、いろんな経験をしたり新しいものを見たり、社会に直接触れて大人になるというプロセスがなくなっている。

一方、まちのほうは若い人に来てほしい。情報が入ってきますからね。そこで、銀座は画廊が多いいことから、美大生を中心にした銀座アート・エクステンションスクールを2002年に立ち上げました。学生たちに、銀座の街の活性化にひと役買ってもらうという活動です。また彼らにも、銀座というまちからいろいろな刺激を受けてもらいたい。具体的には6つの美術大学（女子美術大学、多摩美術大学、東京工芸大学、東京造形大学、日本大学芸術学部、武蔵野美術大学）による「銀座スペースデザイン学生コンペティション」を実施し、銀座の企業のショーウィンドー空間をデザインしてもらいました。そして参加企業の協力により、受賞作品は実際のショーウィンドーで実現させていただきま

す。そのプロセスで、学生たちは社会に触れ、数カ月でぐんと成長していきます。そういう「まちが人を育てる仕組み」をもっているというのは大切なのではないのでしょうか。銀座にかかわった彼らは、きっと大人になってまた銀座に来るでしょうね。そして自分が実現したお店で買物してくれま

す。それを認めた大人たちがいた。また、近くの三角公園と呼ばれる児童公園では、若者たちがライブをやったりしていた。従来なら近隣はやかましいと排除するのですが、自由な活動を受け入れる気分があって、放置していた。そして結果的に、若者文化を基幹とする新しいまちが生まれました。その後は賃料も上がり、店のオーナーも年齢が高くなるので、大人の街になるのかと思っていましたが、結局いまだに十代のまちなんで、大阪の十代の若者はアメリカ村で過ごし、ある時期に卒業して違う界隈を本拠地にするという状況が、30年ほど続いています。ある界隈を自分たちの本拠地だと思う時期があり、そしていつか「卒業する」というニュアンスがおもしろいですね。



いまでも若者でにぎわう大阪のアメリカ村周辺

写真：石井雅典

まちの個性をどうつくるか

橋爪●銀座を支えている人たちの暮らしぶりが、かつては見えたけど、いまは見えない。かつての社用族が減り、客の質も変わってきているのではないのでしょうか。銀座らしい時間の使い方や楽しみ方、まち歩きの方法を、新たに提案できているのかどうか。ドレスコードも含めて、界隈ごとの振る舞いやライフスタイルが銀座にもあるのでしょうか、それが80年代あたりからどんどん崩れていったのかもしない。

しかし東京を見ていると、銀座、渋谷、池袋、六本木、三軒茶屋、自由が丘、下北沢、青山、秋葉原、裏原宿など、まだまだ個性や魅力が

ある場所と、その街を本拠地とする人たちがきちんと分かれているように思います。大阪はエリアが分かれているようで、そうでもない。東京は、銀座と浅草とでは明らかに違いがありますね。盛り場論でいわれるのは、懐かしさを感じる盛り場と、流行りを先取りする盛り場があり、大阪ではそれがエリアとして混在しているのです。大正期などには大阪の民衆娯楽について、「ピアノの演奏を聴くような店でどんぶりを食べるな!」といったニュアンスの評価がありました(笑)。

大阪の心斎橋はかつて、よそ行きを着ていくところでしたが、100円ショップができ、ゲームセンターができ、普段着で歩ける場所になってしまった。その一方で、すぐ近くの長堀にはブランドの路面店が立ち

いくわけです。大阪の場合、新しい商業施設が大阪駅を中心とした界隈、いわゆるキタに次々と計画されている。一極に集中しそんな動きに対して、ほかの商業地が対抗策を講じています。東京はどうですか?先日ミッドタウンに行ったら、大阪弁でしゃべっている人がやたらにいたような印象でしたが。

竹沢●東京はセグメントされているというより、都市が分散していますよね。町田や八王子のほうまで広がっている一方で、ミッドタウンや六本木ヒルズは街の中に街をつくっているようなものです。ミッドタウンを歩くと、いつものように二日酔いで疲れた感じの六本木のまちが広がっていて、何も変わっていないのです。ああいうものをつくっても、まちは変わらない。しかもミッドタウンと六本木ヒルズはいまだ点でしかなく、面的にはつながっていないので、まちとしての魅力は感じませんね。

橋爪●そうですね。おそらく後背地との関係が重要なものかもしれません。渋谷のビットバレーや青山が後背地としてあったから、その頂点としてのヒルズが成立した。それに対して新丸ビルもミッドタウンも、いまでも観光地の様相ですから。これからどうなるかですね。

まちの顔をつくる

竹沢●先ほど橋爪さんが、これからはストリートだとおっしゃったのは、そのとおりだと思います。歩いて楽しい、風景が変わっていく、人の意識のなかでは、行政区分ではなく、通りがまちなんで、全銀座会も通りがはっきりしています。角に位置している商店は、2つの通り会と町会3つに所属していて、それぞれの会合に顔を出すのも大変です。ですが複数の会に顔を出す彼らは、キーマンになることも多い。角地に出店するには覚悟が必要ですね。

橋爪●まちの人が楽しそうで、誰もが自分が暮らすまちが大好きで、使いこなしているところって、観光客から見ても魅力的です。ヨーロッパの街に行くと、地元の人が広場でお茶を飲み、散歩している風景は、外から来た人にも実になごんで心地よく映ります。アジアの街も同様で、屋上で盛り上がっている現地の人々の姿を観光客が見て楽しむというところがある。日常的な界隈を、自分たちで使いこなしているということが大切です。この場所はみんなの場所だけど、自分にとって大事な場所だという思いを集めることだと思います。

竹沢●銀座のある店主が、店の前の通りに立っていて、知った顔が来ると「やあ」とあいさつする、そういうまちがいいんだ、ビルの中



には入りたくないと言って、ビルの高層化に反対しました。彼にとっては通りに自分が立っていることが大切だったのです。

橋爪●地域の人同士、それ以上に地域の人と来街者をつなぐ役割をしている人が大切ですね。加えて、まちの顔となる景観や、シンボルとなる待ち合わせ場所のような点景が必要だと思います。銀座はショーウィンドーをつくらないし出店できない、というような規制はないのでしょうか?

竹沢●それはいいのですが、にぎわいは連続させるように願っています。昨年、銀座にデザイン協議会という仕組みができましたが、そのきっかけになる出来事があったのです。ある有名なアーティストが、銀座通りに建物をつくろうとしたのですが、30mの間に開口部が一つしかない。これでは銀座通りのにぎわいが途切れてしまいました。それを伝えて、デザインを変えていただきました。

銀座は「銀ブラ」という言葉があるように、歩く楽しみのあるまちです。そこにショーウィンドーのような店の顔があり、通りに店が立っていて、人の顔が見える。それが連続してにぎわいやコミュニケーションの場をつくり出している。それが銀座の魅力だと思うのです。まちを楽しめるいろいろな仕掛けも、そこを原点としたいですね。

橋爪●流行やほかの成功事例を追うのではなく、ほかの都市とは異なる個性が必要でしょう。日本の商業地の場合、住宅地のようにすべてを統一することが必ずしも重要ではない。一定のルールを設けつつ、その範囲のなかで、それぞれが本当に自由に建物をデザインしてきた。しかし結果的に、全体として魅力的かという点必ずしもそうではない。一方で、つくり込むばかりでなく、まちの個性を阻害しているものを議論して、取り除くことも必要ですね。戦前には「都市美」&対になる概念として「都市醜」という言葉が用いられました。電線や張り紙の類など、醜さの原因となる邪魔なものを撤去したり、清掃を徹底することが議論され実践されました。近年、昭和のまちなみをアピールしている地方都市の商店街では、高度経済成長期などに設置された看板類を取り除くことで個性化を果たしました。まちの顔づくりとは、厚化粧をぬぐい去って「すっぴん」になって、実に単純に、わがまちにしかない素材を確認することから始まるのではないかと思います。



大阪の中心街区、船場。大阪は、大正14年(1925年)に人口、面積ともに日本一を誇り、昭和にかけて「大大阪」と呼ばれていた。船場も商人の街として栄え、近代建築が生まれた。しかし、バブル到来でそれらの多くが取り壊され、船場のまちは昔の面影を失っていく。
「故郷を蘇^{ふよ}せたい」という一心で、景観デザインに取り組んできた二見恵美子氏。緑で現場を彩る手法は人々を魅了し、その行動力に周囲は動かされ、船場が少しずつ生まれ変わりはじめた。

時を越えた美しい景観

ランドスケープデザインへと目覚めさせたイギリスの風景

大阪市中央区淡路町、地下鉄御堂筋線の淀屋橋駅を最寄り駅とし、三休橋筋と交わる淡路町通り近くに、大正ロマンの趣を漂わす「船場ビルディング」がある。このビルの4階に、環境デザイン設計事務所[E.M.I.PROJECT]を構えているのが景観デザイナーの二見恵美子氏だ。そして船場ビルディングの屋上が、二見氏が日本でランドスケープデザイナーとして活躍する出発点となった場所でもある。

二見氏は祖父母の代から船場で暮らす浪速っ子。大学卒業後、デザイン関係の仕事をしていて、あまりの忙しさに自分を見失いそうな危機感を覚え、いったん仕事から離れることを決意する。そこで、充電のつもりでヨーロッパを巡り、十代で旅して印象に残っていたイギリスへ向かうことに。訪れた湖水地方はピーターラビットの作者、ビアトリクス・ポター

の寄付によって、ナショナル・トラストが1930年当時と変わらぬ風景を守り続けていた。

「こんなに美しく静かな場所があるんだと感激しました。フェリーもモーターは使わず、ロープで引き寄せて川を渡る習慣が今も残っている。イギリスでランドスケープデザインという造園手法が生まれたのは産業革命と同時期。工業化が進むなか、破壊してばかりでは駄目だと反対に景観を重んじる動きが出てきたのです。そのランドスケープデザインの手法とは“自然風景式庭園”。建築で余った空間をデザインするのではなく、その土地がもつ特徴、地形、地質、植物の適性などを考慮し、持続可能な景観計画をすることなんです。そんなイギリスの姿を見て、古く良質な建築物もスクラップ&ビルドで壊されていく大阪のまちを蘇^{ふよ}せたいという強い気持ちがわいてきて、その後、イギリスへ渡り5年間勉強に励みました」とランドスケープデザインに取り組むきっかけを語ってくれた。

緑あふれる屋上庭園で建物を蘇生させる

帰国後、独立事務所を開設したのが大正14年に建てられた船場ビルディングだった。当時、パティオ風の中庭には雑然と荷物が置かれ、入り口の扉も味気ないサッシ戸が取り付けられるなど、ただの古ぼけたビルだった。二見氏は、文化遺産ともいえるこのビルを蘇^{ふよ}せようと、大正当時の姿に戻し屋上庭園をつくることをオーナーに提案するがバブル全盛期で、あっさり断られてしまう。そうこうしているうちにバブルは崩壊し、船場ビルディングには空室が目立ちはじめ、売却しようにも売れない状況になってしまった。今度は心配になったビルのオーナーが二見氏に相談する番だった。

二見氏はさっそく改装に取りかかった。玄関ファサードを修復、中庭には緑を置き、ビル全体の色彩およびサインの統一……。屋上庭園は、自費を投じてつくり上げた。そして、1998年5月末には屋上

を求めて



大阪・船場のまちを緑と文化で蘇生させる

二見恵美子

Emiko Futami

写真……石井雅義



上●大阪シティアターミナルビル (OCAT) の屋上庭園。ビルの上とは思えない見事な庭が広がっている。下左●屋上エレベーターのドアが開くと広がる四季のゾーン。こもりた緑をテラス席で楽しめる。下中●屋上庭園はボランティアが園芸実習しながら手入れをしている (写真提供: E.M.I.PROJECT・二見恵美子著「ランドスケープスタイル」より) 下右 2 点●季節の草花を愛でながら散歩ができる。買い物や仕事の合間に、ふらっと立ち寄れる都会の憩いの場

庭園「ARCOURT」をオープン。ちょうど、英国祭が開催されていたこともあって、イギリス大使館の公式行事に認定され、オープニングに招いたマスコミ関係者が、古きよき姿に生まれ変わったレンガ張りのビルと屋上の庭園を記事にしてくれた。その後もNHKの番組で取り上げられるなど話題となり、見学者も増加。

2001年には文化庁の登録有形文化財に指定され、船場ビルディングは2、3年の入居待ちというほど、人気スポットに生まれ変わった。その手腕を買われ、次に手がけたのが大阪シティアターミナルビル (OCAT) の屋上庭園だった。第三セクターが運営するOCATはバブル時代に建てられた難

波の駅ビルで、屋上庭園の話が持ち上がった1999年には巨額の赤字を抱えていた。二見氏は「植物が自生する庭」を目指し、2000年、4600m²の屋上に200種1万株以上の植物を植え、緑豊かな庭園を誕生させた。屋上庭園完成後、その効果で売り上げが約10%伸びたというのだから、緑で彩られた美しい景観が、いかに

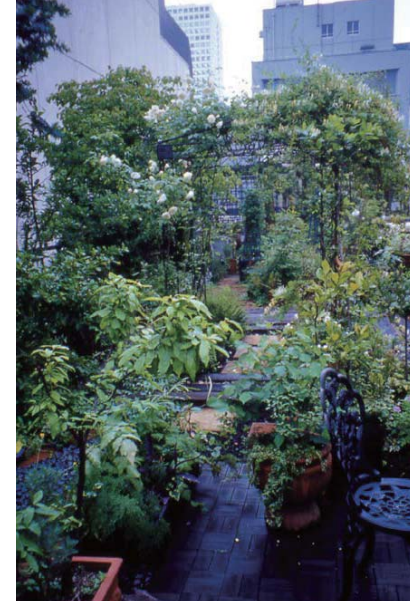
人々を動かす力をもっているかが伺える。二見氏は施工後も「持続可能な景観計画」の考えのもと、ボランティアを募り、自ら園芸指導を行いながら植物の手入れをし庭園を維持している。ボランティアには、プロフェッショナルな手ほどきを受けられると好評だ。7年たった現在、植物は見事に生長し大阪の繁華街のオアシスとして親しまれている。

「良質なものは壊さず保存しながら活用すれば、人は戻ってくるはず。目先のことだけで計画したものは飽きられるのも早い。長く楽しめる本物をつくりたい。だから引き渡し後も緑を保つためアフターフォローは欠かせないのです。日本では環境教育が遅れています。庭園を手入れすることで一人でも多くの方が環境のことを考えてくれれば、良いと思ったことはすぐに実行、先義後利、結果は後からついてくると思って仕事をしています」と話す二見氏。公共施設のランドスケープデザインにとどまらず大阪のまちづくりにまで活動の場が広がっていった。

大阪人の心意気で まちは素敵に変わっていく

中之島では2008年に中之島新線が開通する予定だ。中之島高速鉄道 (株) が、東西3kmにおよぶ中之島に4カ所の新駅をつくるため、大川の下にトンネルを掘り、大規模な地下鉄の工事を進めている。二見氏は、この工事現場を“見る見られる新線工事” “工事を実況中継する”をコンセプトに景観デザインをコーディネートしている。工事現場を囲う塀に古レンガや木を用い、大川の上には遊歩道を仮設し緑化、風力発電による夜間のライトアップと、中之島の景観を損なわない“居心地のいい”工事現場を実現した。

また、事務所近くの船場・三休橋筋エリアの再開発にも力を注いでいる。この周辺には大阪市中央公会堂や福沢諭吉が学んだ適塾など歴史的建造物が数多く残るが、観光資源や文化的なエリアとして十分に機能していない。三休橋筋を魅力ある通りに生まれ変わらせることで船場を活性化しようと2002年、役所にまちづ



左●船場ビルディングの屋上庭園「AR COURT」。古いだけの建物が魅力あるスポットに生まれ変わった。＊現在は閉園 右上●再生前の中庭。自転車や荷物などが置かれ雑然としていた (写真左ともに写真提供: E.M.I.PROJECT・二見恵美子著「ランドスケープスタイル」より) 右下●現在の中庭。緑とベンチを配し、おしゃれな空間に



左●中之島新線工事現場 (写真提供: E.M.I.PROJECT・二見恵美子著「ランドスケープスタイル」より) 右●三休橋筋に設置された本物のガス灯。柔らかな光が通りを美しく照らす

くり再生プランを提案した。これに対し、市は本格的に取り組みを実施。以来、歴史的建造物の保存活用、道路整備、電柱の地下埋設、街路樹の整備などが進められている。20年来の大阪市中央公会堂の保存募金など、二見氏の積極的な活動が地域の同じ志をもつ人たちと環を広げ、2006年には大阪ガスによる本物のガス灯50本の寄付が実現する。

「大人がそぞろ歩きできるような穏やかで素敵な通りにしたいですね。流行って廃るものではなく、長期間で本物をつくりたい。まちの品格を守るためには、そのまちの人たちが本気で守っていかねばならない。かつて船場には市民の

寄付による立派な建造物も多くあり、昔はそんな気骨のある人が多かったと聞きます。今、その大阪人の心意気が発揮できていません。けれど、未来の姿が見えてくれば、みんな賛同してくれるはず。三休橋筋のまちづくりが、後世に続くような都市計画のモデルケースになればと思っています」。

ひとつのビルの再生・屋上緑化から始まった取り組みは、新旧を調和させ、蘇生させることで、新たな魅力を生み出すまちづくりへと発展していった。

美しいものへのこだわりと生まれ育った地元を愛する気持ち、二見氏の原動力となっている。





ビルの谷間に集う人々、ここはコレド日本橋アネックス広場。以前はあまり使われていなかったというこの広場のリニューアルを手がけたのが、オンサイト計画設計事務所の長谷川浩己氏である。
「パブリックな場所に、プライベート性のある居場所をつくりたい」と話す長谷川氏のデザインには、そこに佇んでみたくなる場所が必ずある。高校生のころから環境への関心が強かったという彼は、ランドスケープデザインの世界で、水を得た魚のように楽しんでいる。

まちに^{たたず}佇める居場所をつくる

快適な空間に変わった コレド日本橋アネックス広場

2004年にグランドオープンした「コレド日本橋」は、東急百貨店日本橋店跡地に建てられた再開発ビルで、北側にはオープンスペースとしてコレド日本橋アネックス広場がある。6mを超える樹木と、段差を利用した水の流れが売りだったが、実際にはあまりうまく使われていなかった。翌年、オープン一周年を記念して、この広場の活性化を図るイベントが企画された。広告代理店が集められ、コンペを行ったなかから選ばれたのが、博報堂と設計事務所「オープン・エー」の馬場正尊氏らによる、広場全体を変える提案だった。そして彼らからの誘いで、長谷川氏が参加することになった。皆の合言葉は「街なかに、誰でも座れるホテルラウンジをつくらう」だった。

「なんとなく居やすい、という場所にしたかったのです。そのためにも、テーブルをたくさん出そうというのは最初から皆

で決めていました。都市の広場に、動かせない椅子が置かれることはありませんからね。盗まれたり壊されたりするのを嫌がるんです。

具体的なデザインでは、広場の地下が駐車場になっていることから、床にアンカーが打てず、何もいじらないのが前提でした。それと床に水勾配がついているので、椅子の置ける平らな床が必要でした。そこで提案したのが、島状のウッドデッキです。これがあらゆることのベースになりました。座るベンチとして、また、照明のための仕込みスペースや、プランターを固定するベースにもなっています。四角い広場にウッドデッキが、まるで雲が浮いているようにあり、とても有効に働いています」(長谷川氏)

なんとなく居やすい場所に仕向かった、という彼の狙いは当たった。昼休みの広場では、弁当を広げたり、新聞を読んだり、昼寝をしたりと、多くの人が思い思いにひと息ついている。利用者は働く人ばかりではない。ペーパークーを押しお母さ

んたちの姿も多く、日本橋界隈での、人気の休憩場所になっている。長谷川氏は、実際にリニューアルしてみて、こうしたスペースへの潜在的欲求が高いことがわかった、という。都心部の公開空地では、あまり利用されていないものも多いが、デザイン次第でオアシス空間になることが証明されたのだ。

周りにない密度を実現した 丸の内オアゾの屋外空間

同じく2004年にオープンし、東京駅周辺の新名所となった「丸の内オアゾ」。そのランドスケープデザインも、長谷川氏の仕事だ。コレドがインスタレーションのような仕事だったのに対し、オアゾは、ディベロッパーや建築設計者とともに、ビルが建つ前の基本計画から参加している。使われ方が見えない段階での計画は、魅力的というよりは無難なものになりがちだが、ホテルと4つの高層ビルをつなぐ足元空間は、エリアの一体性を



Hiroki Hasegawa

写真……シロバラタク

時代の要求を五感でとらえるランドスケープアーキテクト

長谷川浩己



初夏の風が通り抜ける木陰で休む人たち。昼休みともなると、すべての椅子が人で埋まる人気の広場だ。コレド日本橋アネックス広場は、2005年度、建築・環境デザイン部門のグッドデザイン賞（日本産業デザイン振興会主催）を受賞した



細部にこだわった丸の内オアゾの足元空間。アクリル板の葉の模様は、広場に植えられたエゴの葉がモチーフというオリジナルデザイン



表現する重要な役割を担う。そこで彼は、ランドスケープの最も地となる舗装に工夫を凝らした。

「そこはビルに囲まれていて外から見えない空間です。端整でフォーマルな東京駅前の雰囲気と、ちょっと違ったスケール感の場所をつくろうと、オアゾのテーマを『周りにないスケール感』としました。小さなスケールのものがいっぱい集まってきている感じ、を出そうと考えたのです。例えば、ペイメントにはちばん小さいもので60mm角のピンコロを使っています。その素材は、玄晶石、緑の羅源石、PC、木、レンガの5種類。足裏の感覚もデコボコして、職人さんの手の温もりが伝わるような空間になっています」

小さい石畳を敷き詰めた庭には、視線を微妙にささげる“ついたて”の付いたベンチが置かれていて、ちょっとしたプライベート空間になっている。サラリーマンが本を読んでいる姿を見かけることも多い。よく見ると、すりガラスのようなアクリル板には、トンボや葉など江戸小紋

の柄がついていて、同じ柄がマンホールにもあしらわれている。遊び心で「江戸」を隠れテーマにしたという。ほかにはないこうした密度が、オアゾの空間を見事に際立たせ、無難になりがちなオフィス街に、ふと立ち止まりたくなるような楽しさを添えている。

変化のなかで“次の一手”を考える

長谷川氏が日ごろ思っていることがある。それは「居心地」についてだという。

「ふらふら歩いていて、一服するときどこを選ぶのか。普通の人でも無意識に反応し選んでいる。気持ちが悪く、感情が動く、という感じです。そういうことをさせる『佇まい』をつくりたいと思っています。僕らが扱っているのは“図と地”でいうところの“地”の空間です。しかも手がけているのはほんの一部、浜辺の砂粒ひとつのような感覚でとらえています。与えられた“地”の空間がどのような状態の

かを自分なりに把握して、それに対して一手を打つ。そこをきちんとしたい。コレドの場合も、広場を見せたいのではなく、都市のなかにこういう空間が存在していたんだ、ということに気づかせることでした。大通りから一歩裏手で、建物に囲まれた、いいスペースでしたから、それにちょっと手を加えることで、そもそものよさを引き出したのです」

変わり続ける“地”の空間をどう読むかが重要だ、と長谷川氏は語る。“次の一手”は、そういう動きのなかで常に考えているという。

「“地”をどう読むかは感覚です。いまはパブリックのなかにプライベート性のあるものを、押し付けがましくなくつくりたいと思っています。なぜといわれてもわからない。それが当たりそう、という感覚です。“図と地”の関係はさらに流動的です。膨大な“地”のなかから突然、“図”として浮かび上がる、そのダイナミズムがおもしろいのです」
どこかよそ行き顔をしているまちでも、

居心地のよさそうな一角があることで、人々は都市に寄り添うことができる。「居場所とは意識化された“地”の空間である」と長谷川氏は言う。彼の「いま」は、そんな居場所づくりに向かっているのだ。

次のテーマは観光地

高校生のころから自然保護や環境問題への関心が強くあったという長谷川氏は、「環境」と名のついた学科に惹かれ、千葉大学の園芸学部環境緑地学科に入学する。そして大学3年になって初めて「造園」という分野があることを知り、ランドスケープデザインを海外で学ぼうと思いつく。大学卒業後、足立区役所土木部公園課工事係に就職し、仕事帰りに英語を勉強。留学費用を1年で貯め、オレゴン大学大学院ランドスケープ・アーキテクチャーに留学する。

「とにかく一度、日本を出てみたかったのです。日本の場合、造園は農学系ですが、オレゴン大学では建築も美術も履修

することができました。僕のデザインの勉強はアメリカが初体験ですから、日本と比較しようがないのですが、基礎から学べたことはよかったですね。とにかく毎日、授業についていくのに必死でしたが、僕だけでなく、向こうの学生はみんな必死で勉強している。そのうちに、なんのためにデザインしているのかわからなくなって、ひとり悩みを深めていました。スロースターターですから、人より遅く悩み始めたようです」

2年半の大学院修士プログラムを修了後、そのままアメリカの設計事務所就職する。ハーグレイブス・アソシエイツ、ササキ・エンバイロメント・デザイン・オフィスで経験を積み、1992年に帰国。そして1998年に、ハーバード帰りの三谷徹氏、戸田知佐氏とともに、ランドスケープデザインを手がけるオンサイト計画設計事務所を設立した。彼らの洗練されたデザイン感覚は、ランドスケープの重要性を意識した建築家たちに高く評価されている。そして、長谷川氏の最近の仕事で

最も注目されているのが、軽井沢の高級リゾート「星野リゾート・ホテルプレストンコート・エリア」のデザインだ。2006年のグッドデザイン賞、芦原義信賞を受賞している。

「ここでは、“風景でお金が取れる”ことを目指しました。あそこの自然、原風景をつくり、その風景でお客さんを呼ぶことができれば、その風景を維持しようとするよね。結果、そこの自然に対してフィードバックすることができる。つまり、本来あるべき風景を取り戻すだけでなく、それこそが場所のアイデンティティで、価値あるものとなるのです。

最近、観光地は僕の中でおもしろいテーマなんです。いままでの観光地の多くは、そもそもそこにあった魅力とは別なことをして人を呼んでいる。それではいずれ飽きられます。そこで持続できる観光は何かと考えると、まずベースにすべきは、その場所固有の風景なんです。星野リゾートの星野さんはそのことがよくわかっている。そこにある生態系になるべく寄り添ったかたちで風景をつくり、それが評価されるのが、皆にとっていはんいと思っています」

*

観光地は、日常のちょっと先にある居場所。そして、観光地が居場所であり続けるためには、人々のイメージを裏切らず、生態学的に安定した自然、ずっと前からそうであったかのような風景があることだと言う長谷川氏の打つべきの一手は、経済活動と環境回復が矛盾せず行われ、地方が持続的に活性化していくためのランドスケープデザインだ。“魔法の一手”になることを期待して。 **NE**



軽井沢にある「星野リゾート」のランドスケープデザイン。風景で人を呼ぶことができることを実証写真：吉田誠

プラハの市街を割って流れるヴルタヴァ川。その東岸沿いにアール・ヌーヴォーの建築が連なっている。ファサードの彫刻群が楽しい。幼児、裸の男や女、花々、聖人。街全体が建築博物館ともいわれるプラハを代表する「展示室」である。

その一角に、なんの前触れもなく現われる超現代建築。ガラスと鉄骨がねじまがり、全体が傾きながら、踊っているようでもある。実際、設計者のひとり、二十世紀の末に完成したこのビルに「ジンジャーとフレッド」の愛称を与えたという。ダンスの名コンビ、ジンジャー・ロジャースとフレッド・アステアのことである。この躍動する建物には、圧制から解放され、自由化の喜びに沸いたチェコの人々の気分が表われているのであろう。

アンティークな街並みをたっぴり歩いた末に、スーパーモダンに達着する。街並みを突然に切って、時間を飛ばす——。都市計画者の明快な意志が感じられる。そして、ファサードを飾る彫刻群と「ビルのダンス」とから、歩行者自らがストーリーをつむぎだすことを求められている気がした。見事な連なりである。

これだけ貪欲なストーリーへの指向性を、日本の都市に見いだせるであろうか。

銀座で三十年近くバーテンダーをしている人が嘆いていたことがある。「このごろの若い人がよく、印刷した紙を持って店に来るけれど、あれには困る。なんとかならないかね」と。つまり、ネットで店の場所を

探し、プリントアウトした地図で道順をたどりながら、店までやってくるのである。

「ぶらぶらしながら、探し探して、たどりついてくれたら、気分がちがうのに。地図の矢印だけが頼りというのでは、地下鉄の駅と、うちの店が隣同士のようなもので、面白くない」

このバーテンダーは、街のストーリーのなかに、自分の酒場が組み込まれることを望んでいるのである。ところが客は、地図に目を凝らして一直線にやってくる。ストーリーどころではない。さらに、最近のケータイ地図になると、プリントアウトさえしないのだから、街は、画面上に現われては消える記号の群れでしかなくなる。

こうなると、街との付き合いが欲望のストレートな充足へと収斂される。ネットで見つけて出かけたバーのことを、「ああおいしかったね」と言い合った後は忘れてしまうようにして。

ぼくのような都市歩行者にとって、街はさまざまな楽しみを提供してくれるけれど、なかでもっとも大きな楽しみのひとつが、ストーリーづくりをそのかされることである。建物も、道行く人も、動物や植物も、どれもこれも、そこに登場してくる。ストーリーには、筋骨きがあるものはかりではない。驚きや喜びの瞬間の表現である場合もあり、静止した一光景であることもある。

最近の東京で、豊かなストーリーの数々に出会うのは、

湾岸地域である。そこは、ストーリーづくりのための素材に事欠かない。

新橋あたりから、新交通ゆりかもめに乗ってみよう。レインボーブリッジを越えて、台場に入ったら、適当に下車する。よく知られるのはホテルやショッピング施設がある海べりだけれど、これらに背を向けて、「内陸部」に入っていく。するとたちまち、前方に広大な草原と林がひろがっているのに出会うはずである。花が咲き、青々と葉が伸び、若い木々が生い茂り。

この光景に遭遇したとき、ここに、一日一組だけ大道芸人を招いて、思う存分に芸を披露してもらったらどうであろうか、と考えた。台場の自然と大道芸の組み合わせから、さまざまな夢がひろがるのではないか。

さらに先に進み、ゆりかもめの終点に展開するのは、高所得者向けのマンションが目立つ再開発地域、豊洲である。そのショッピングモールの賑わいを脱けた途端、夕陽ポイントが出現する。運河の向こうに夕陽が沈む。この水面に向かって傾斜する芝生には、点々とベンチが置かれている。他人の邪魔にならない、寝転んで夕陽を眺めることもできるであろう。

ここからどんなストーリーにつながっていくか。ひとりだけで見上げる夕陽、ふたりで、あるいは数人でおしゃべりしながら対面する夕陽、それぞれに、生まれてくるストーリーの質はちがう。いずれにしても、くすんだ色合いの都心部に落ちていく夕陽に心を動かされ、ふた

ん思わないことが思い浮かぶかもしれない。

ほく自身の好みを言うと、湾岸地域でストーリーへの渴望をもっとも触発されるのは、葛西臨海公園である。千葉方面に向かう郊外電車が、地下から高架へ投げ出されてすぐの海側に、それは展開する。この公園があるのは、東京ディズニーランドのすぐ手前というところも、なにか象徴的である。

園内を海に向かって歩くと、透明のボックス型展望台がたちはだかり、そこからうつすらと水平線が望める。さらに海辺に至れば、人工砂州の向こうに、水平線はさらにはっきりと見えてくる。

高架鉄道の車内で、眼下にひろがる緑の公園を眺めた瞬間から、海べりで沖合の水平線を望むまでに、画面が何度も切り替わる気がする。そのたびにストーリーが浮かんでくる。

先の銀座のバーテンダーは、若い客たちが街を見ようとしないうちに不満を述べていた。その言い分をもっともだと思いつつ、歩いてストーリーが思い浮かぶぐらいに魅力のある街かどうかを、まず問う必要があるかもしれない。干からびた街には、干からびた視線しか向けられない。

豊かなストーリーが育まれる可能性のある都市をつくりだすこと、それは、そこに生きているほくたち次第なのだから。

ストーリーが育まれるまち

枝川公一

ノンフィクション作家

